

# 学校体育における「スポーツ教育の一貫性」を考える

——スポーツ不得意者との関係——

中 野 紀 明

## はじめに

現行の学習指導要領では、「生涯スポーツへの対応」が強調されている。

これに関して、大学の体育実技の授業を通して考えている問題点のいくつかをあげてみたい。例えば、卓球のストロークを指導していて気づくのは、緩く出された打球を打つのに力を入れ過ぎたり、勢いをつけ過ぎることなどからラケットのスイート・スポット (Sweet spot) にボールを当てられない者が多数いることである。そこで、「相手が楽に返球できるような緩い打球」を打つように指導してもなかなか出来ない。また、水泳を例に挙げるならば、顔を水面上に上げたまま上体を立てて力をいっぱい使って、あおり足で平泳ぎらしきことをする者がいる。卓球や水泳に限らず、他のスポーツでも同様のことがよくある。また、うまく出来なくてもゲーム形式がとれば、それで良しといった感じのやり方を多く見かける。

これらの動きが全て悪いというわけではないが、このような事例は、小学校から高等学校までの10数年間にわたる体育実技授業（特にスポーツ教育）の中で、スポーツ不得意者を「出来るようにする」とか、「うまく出来るようにする」ということについて、小学校から高等学校までの教師が、「関連性」をもたせた指導をすることがなかったということの表れであろう。

小学校から高等学校までの教師が、「関連性」をもたせた指導をしていたならば、こうした問題は多少なりとも妨げたのではないと思われる。

小論においては、小学校から高等学校までの教師が、こうしたことを充分に考慮して指導することを「スポーツ教育の一貫性」と考え、このことについての考えを述べたい。それはどんな内容なのか、また、それを実践するにはどのようにすればよいかなどについても、現状のスポーツ教育の問題点と併せて考察してみることにする。

一三八

## I スポーツ教育とは何か

### 1. スポーツの意義

「スポーツ」という語と関連して、例えば、遊戯、競技、体育などの類似語が多いが、これらを厳密に区別して使用していないのが実状である。

もともとスポーツは、deportare (ラテン)、desporter (仏)、disport (英) の語源の変遷が示すように、遊戯の領域に含まれる。英語の sport は disport の略形であるが、これは同根の古代フランス語の (se) de(s)-porter (自ら楽しむ) の名詞化された desport の借用語である。しかも、この語源は気晴らしや満足に転意したラテン語の de-portare (持ち去る、移る) に発する。したがって、スポーツは遊戯の世界にはいる。<sup>①</sup>

このことから、スポーツは本来「遊び」に属するものと考えられる。したがって、スポーツには本来「やらなくてもよい自由」があるとともに、どのようなやり方をしてもよいことになる。現実にはいろいろなやり方がある。

しかし、「遊び」本来の意味であると考えられる、個人的な身体的・精神的欲求を満たすには、スポーツの課題解決に「その人なり」に挑戦して、「その人なり」に出来るということが大切である<sup>②</sup>と考える。この「その人なり」を大切に<sup>③</sup>する理由は、「いろいろな能力の持ち主がいること」と「やらなくてもよい自由」を認めたいからである。

それでは、スポーツが出来るとはどういうことを言うのであろうか。

スポーツが出来るというレベルにはいろいろあるが、まずは「偶然でないこと」が大切であろう。そのためには、「一連の動き (運動)」のうまさを身につけていることが必要である。

例えば、ゲームをしない水泳ならば、一連の動き (運動) 一つが出来れば良いことになる (ゆったりと平泳ぎを楽しむのもここではスポーツと解釈する)。しかし、スポーツが出来るということは、なんといってもゲームが出来ることである。そのためには、一連の動き (運動) を身につけていることはもちろん、ゲームでの動きを身につけていることが重要になってくる。例えば、水泳ならスタート (飛び込み) やターンが、卓球ならポジションの動き方などが必要になる。また、球技における配球のうまさや駆け引きのうまさなども、一連の動き (運動) のうまさに関係してくる。すなわち、スポーツが出来るためには、「一連の動き (運動)」のうまさを身につけることが重要なのである。

次に、一連の動き (運動) のうまさとはどういうことを考えてみることにする。

スポーツの本質は、ルールに則って勝ち負けを競うものである。そのためには、偶然に出来たのではよくない。

一三七 これに関連して、クルト・マイネル (kurt Meinel) は、スポーツ的運動の原理は合目的性と経済性であるとしている。

それによると、「合目的性はあらかじめ計画されたことが実現されたことと一致するかどうかで表わされる。スポーツ運動経過が合目的とみなされるかどうかは、努力目標と適切な運動を通してそれが実現されたことを比較することによってのみ決定されることになる。このためには行為全体のなかで幅広く洞察していくことが必要である。人間は自分の行為基準となる客観的な合法性、諸条件、諸前提について必要な知識をもっていれば、それだけ確実に合目的な行為を成功

させることになる。客観的合法則性の認識と知識がそこにあれば、合目的な行為はより確実に実現される。」という。

また、「経済性とは、運動を遂行するときのエネルギー消費の節約性を表わしている。スポーツ運動は経済的に行なわれなくても、あらかじめ計画された目標に達することはできる。しかし、合目的であり、同時に経済的である運動は、さらに大きな達成を果たすものである（特に長い時間を要する場合は）。経済性の意味していることは、最大の達成が最小の力で実現されるように、そこにある力を使わなければならないということである。運動トレーニングにおいては、このことは運動形態の客観的な諸徴表（特に運動リズム）が注意されることを前提とする。それは、ここで取り扱う諸カテゴリーが合目的かつ経済的な運動形態の客観的な判断基準だからである。」と述べている。

こうしてみると、先に挙げた平泳ぎ（「ゆったりと楽しむ泳ぎ」）も、この経済性と関係がある。泳いだ後、身体に心地好さが残ることが大切である。勝ち負けを競う場合も、動きにこの経済性があれば、本人も心地好いだろうし、それを見ている者も美しいと感じるだろう。

さらにクルト・マイネルは、この合目的性と経済性を高めるには、次の八つの「運動の質」<sup>④</sup>が不可欠であるとしている。

- |                     |   |       |
|---------------------|---|-------|
| A 運動の局面構造（空間・時間的分節） | } | 図形的徴表 |
| B 運動の調和             |   |       |
| C 運動リズム（力動・時間的分節）   | } | 力動的徴表 |
| D 運動伝導              |   |       |
| E 運動の流動             |   |       |
| F 運動の弾性             |   |       |
| G 運動の先取り            | } | 心理的徴表 |
| H 運動の正確さ            |   |       |

※図形的徴表、力動的徴表、心理的徴表は、スポーツ教育的意義に関して同じ価値をもつものではない。

一連の動き（運動）の全てに、この八つの質が含まれる訳ではないのだが、うまさとは、その運動に含まれる質が合目的性と経済性を高めるような動きをもっていることだと述べている。

運動の質と量（運動実施結果としてのスピードや高さなど）の関わりは、質の良さが増せば量も増すという関係である。裏返せば、質の良さがあまり無いまま量を増やそうとすることは、合目的性と経済性の原理を無視することであり、勝ち負けを競うスポーツの場合なら負けることになる。勝ち負けを競わない前述のゆったりと楽しむ泳ぎでも、心地好さが無くなることになる。質を完全に高めてから量を増す、というようにはっきりと分けられることではないが、何れかと言えば、質を先に身につける方が何かとよいようである。

例えば、量的には少ない運動の仕方でも質が身につくことは、その運動がそれ

なりに出来ることであり、その運動の面白さが分かりやる気も出てくるだろう。また、気持ちも良いだろうし、怪我も少ないだろう。そして卓球のラリーも長く続けられるようになり、よりうまくなるだろう。この結果、量的なことも増すだろうし、競争も面白くなってくるだろう。特に、うまくなるようになることは、例えば、対人的運動の場合ならば、練習段階で相手が容易にやりやすいようにしてあげることが出来、お互いがうまくなれるという「共存」も出来るわけである。

## 2. スポーツ教育の意義

先に考察したように、学習者がスポーツ教材の課題解決に挑戦したいこと（一連の動き（運動）のうまさを身につけたいこと）を教師が支援する（指導する）ことである。そのためには、教師と学習者の間に「教えたい—学びたい」という関係が成立しなければならない。

また、学校教育の中でのスポーツ教育であるから、教師对学习者が1対1ではなく、1対多数という条件の中で行われる。つまり、いろいろな能力の持ち主が集まるという中でのことであり、指導には当然「幅広さ」が必要となってくる。さらには、スポーツ教育を担当するのであるから、スポーツを教えることと学ぶこととの関係にある他の場面を見ておく必要がある。例えば、自由習得の場（生活の中で親が子に教えるなど）、学校や社会での部活動や、同好会、民間のスポーツ指導教室などがこれである。一般的に自由習得の場や部活動の中には、教える者と習う者の1対1の何らかの「やりとり」がある。そこでは一連の動き（運動）の習得には、大抵「時間をかける」、習う者には「やる気」があるなどの条件のもとで行われている。

次に、人間が生まれて成長していく過程で、いろいろな運動を身につけていく「運動の一般的習得過程」について触れてみたい。ある一連の動き（運動）のうまさを身につけることは、次のまた違う一連の動き（運動）を身につける準備になっていて、「レディネス（readiness）を積み重ねている」という特徴がある。例えば、生まれつきの何か（生命力のようなもので具体的には握る、なめるなど）をもとに成育環境の中で一連の動き（運動）を、さらには、それをもとにして、また次の一連の動き（運動）を習得していく（ハイハイ→つかまり立ち→立つ→歩く→走る→跳ぶなどへ、握る→放す→操る→投げる→たたく→打つなどへ）。しかし、ある運動が完成しないと次の運動に進めないということではない。この「レディネスを積み重ねている」という特徴は、それまでの人生における運動経験の差で、一人ひとりレディネスが違うということを示している。したがって、ある運動を身につける時、学習者によっては、まず、レディネス不足の充足をやらなければならないこともある（例えば、卓球のストロークを指導する時、ボールを打つ練習をするのではなく、まず、ラケットのスイート・スポットにボールを当てることを練習させることもある）。

また、ある運動の実施を「長時間続けるとそれなりに経済性の高い動きにな

る」というもう一つの特徴がある。箸や鉛筆などの使い方、歩く、自転車に乗るなどがその例であろう。それは、その運動を下手、不器用、不安定なりにやっていると、そのうちにその運動の感覚的なこと、技能的なこと、体力的なことが「一体化」して身につく、その運動が上手に、器用に、安定して出来るようになるということである。これは、要素的な体力をつけてから、一連の動き（運動）を身につけるという考え方（「体操」<sup>⑤</sup>）とは異なるものである。ここで、教えることと学ぶこと（うまさを身につけるための工夫と手順）とはどういうことかを考えてみたい。スポーツが出来るようになるには、理性的な知識も関わるが、スポーツ（一連の動き（運動））は、自分が実際にやってみて、身体で実感しないと分からない（出来ない）という「暗黙知」<sup>⑥</sup>であることを確認しておく必要がある。練習の場面でよく「理屈は頭で分かるんだが」といわれるように、「暗黙知」とは言葉だけではなかなか伝えられないことを含んでいる。その運動の要領（コツ）を伝えること（教師）と感じ取ること（学習者）の関係は、理性的な知のそれとは違うのである。これは、学習者一人ひとりがその習得したい運動に対して持つイメージやレディネスが違うからである。したがって、示範を見る、感じる、説明を聞く、運動を実施するなどの、どの段階でも目指す動きから「ズレ」が生じるのは当然の事である（特に、出来そうにない学習者は）。

スポーツが「暗黙知」であることと、イメージやレディネスの違いからくる一人ひとりの違いを考えると、運動を教えることと学ぶことの間には、教師と学習者との主観的な事柄（認識主観）の「やりとり」が必要になってくるわけである。

## Ⅱ 現状のスポーツ教育で不得意者がうまれる理由

授業のあり方には、指導方法、制度（1クラスの学習者の人数、一種目にかかる時間数、必修か選択かなど）、各スポーツ種目の性質などが、さらには、それらを含む学校体育のあり方の歴史的慣習からの人々の「先入観」などが深く関わって、スポーツを幅広く捉えられなくしてしまっていることが、不得意者を生んできたと考える。

### 1. 教員養成課程における指導のあり方

#### (1) 運動研究と実技指導の隔たり

現在もそのようであるが、自然科学的な考え方が支配的であって、「臨床の知」<sup>⑦</sup>（自然科学の知に対応するもので、運動実践の場面でその人にとって最適知識）を軽視する傾向の歴史的背景がある。それは、「自然科学の知は、その正しさを原理上、容易に証明して見せることができる（数値化して誰にでも分からせることが出来るし、同じことを場所が違っても数値で再現することができる）のに対して、臨床の知は、その正しさを同じように証明して見せることができなかったから」<sup>⑧</sup>である。

教員養成課程において、指導方法を教える時も、その歴史的影響が強いように

思う。運動が「どのようになっているか」を研究するのに、自然科学的な研究が中心である。例えば、出来る者たちの実施した運動の物理的時間、力の量、力の方向や筋電図など、部分だけを正確に見て、その結果を数量化する研究が多い。すると、その運動がどうなっているかは、数量的に誰が見ても分かることになる。また、この研究方法は不得意者たちの数量化した結果と、出来る者たちの結果とを比較しやすいのも確かである。しかし、その見方は、その運動実施者の力の入れ方の感じ、うまく出来た時の動き方の感じ、精神的なことなどは、ほとんど捨てられてしまっているのである。確かにその辺りのことは数量化しにくいことではある。また、出来る者と出来ない者の部分的なことの数量化された違いが分かっても、出来ない者たちをうまくするには「どうしたらよいのか」という答えは、ほとんど何も出てこないのである。出来ない者にとっては、運動の部分の数量化よりも、出来るようになるにはどんな感じで動くかとか、力の入れ方の感じを知りたい（あるいは実感したい）のである。教師も教えるために、その辺りのことを知りたいのである。つまり、一連の動き（運動）は、「暗黙知」なのである。

このような自然科学的な研究方法は、その運動実施者の運動経過（臨床の現場）からは、いろいろな意味で遠ざかっていくやり方であると考ええる。

「運動を学問的（自然科学的）に研究する」ということと「運動をする」ということ、「運動を教える」ということの間には隔たりがあり過ぎるように思われてならない。

小論では、その運動を教えるには「どうすればよいのか」を研究することが臨床の知的研究であると考ええる。そのためには、学習者の実施した運動経過をそのまま大切にしなければならない。それには、実施者の力の入れ方の感じや精神的なことなどをできるだけ細かく観察しなければならない。学習者の主観的なことも扱わなければならない。すると、現在の自然科学を主とする学問からは遠のくことになる。

極論すれば、運動の自然科学的な研究は、その運動が（その運動をする人、しない人に関係なく）「全体にとって、どのようになっているか」を分からせるために研究することである。一方、臨床の知的研究はその運動をする「その人たち一人ひとりが、出来るようになるには、どうしたらよいのか」を研究していると言える。

前者の研究では、指導に生かせる研究があまり見当たらないのは、この辺りのことが関係しているようである。もしも生かしているとしたら、教える場で、その教師がその結果を「主観的（自己の認識から）」に判断して活用しているものと思われる。卒業研究などでは、運動を自然科学的に見る研究が中心であり、理論の授業でも分野を細分化しての授業が中心である。暗黙のうちに自然科学的な考え方で指導しなければならないと、教師になる学習者に教えている傾向があるように思われてならない。すなわち、「主観的な指導は駄目で、客観的な指導でなければならない」といわれていることである。<sup>⑤</sup>

## (2) 実技指導の傾向

将来、教師になる学生たちが、実技が出来るようになることだけを目指していて（それも大切である）、指導方法をあまり学習していない傾向がある。

例えば、私の教科教育法体育を受講する前の学生が「運動はやらせておけば出来るようになる」と考えているように。やらせておけば出来るような者はそれでよいのであるが、出来ない者がいるからどうすればよいのかを考察しているのである。

中学・高等学校の教員養成課程で指導方法を教えても、一般的に能力の高い者の集まりであるためか「完成型模倣型の指導方法」になる傾向が強いように思う。また、現在は部活動で経験したスポーツ種目が教師になってからの専門種目になる割合が非常に高い。部活動ではスポーツ観が一つ（勝つことだけを目指す）の傾向であるため、教師になっても以外と他のスポーツを知らない、出来ない、たとえ出来ても指導出来ないという傾向がある。そのために教える内容が乏しく、授業ではゲームばかりをやらせる傾向になる。

現状の教員養成課程では、先に触れたスポーツが「暗黙知」であることを踏まえて、いろいろな能力の学習者に対する幅のある指導方法を教えていないようである。したがって、特にレディネス不足の者を指導することは、たとえ自分の専門種目であっても大変に難しいようである。

## (3) 教員養成課程における実技指導の考え方

いままでは、いろいろな能力を持ち合わせた学習者がいることを認めた幅広い指導方法ではなく、具体性の無い一般的な学習者にどう教えたらいいかというような指導方法を教師になる学習者に教えていたようである。いわば、その運動の完成形の「抽象モデル」<sup>⑩</sup>をみんなに一様に押し付ける指導方法であった。

また、学習者の捉え方にしても、「皆が同じ感覚器官で、同じ情報を得るのだから、皆が同じ様に感じるはずである。だから、皆に抽象モデルを押しつけてもよい」<sup>⑪</sup>という考え方が支配的であった。つまり、心身二元論的指導（理性だけが人間を動かすという考え方で、ことばで運動を説明すると教えてしまったという感じを持ってしまうこと。現在1クラスの学習者数が多いから、なおその傾向が強い）が出来ると考えていたとみてよい。

ところが人間は、自分の内面に新しく入ってくるものごとには、前もって持っているイメージで自分勝手に判断したり、感じたりするもので、いわば先入観でものごとを見るものである。このために、同じ示範を見ても一人ひとり感じ方が違うのである。この人間観に立つなら、教師自身がその運動を実際にやってみて、その学習者にとってどうなのか、という感じを大事にする指導が必要である。そこでは特に、教師が学習者の運動経過を観察して、運動共感<sup>⑫</sup>（教師は実際には動かないが学習者の動きと同時に、学習者と同じ運動課題をした時の感じを教師自身の中に呼び起こし、学習者の力の入れ方などの違いを感じ取ること）をする時の教師の主観が大切になってくる。しかし、現状では、これらを見捨てた指導（その学習者がその運動をやってみた時の感じ＝学習者の主観はほとんど問題に

されていない)をしていた傾向が強いと考えられる。つまり、抽象モデルが与えられるだけで、教師の運動共感(主観)によって学習者の主観(感覚や感情)を大切にする指導がほとんどなかったということである。

最近、種目によっては出来ない者に対する指導マニュアルが出され始めた。しかし、そのマニュアル(これも一種の抽象モデル)通りに教える教師が多数いるようである。つまり、そこでも教師の主観(考え)を働かせて工夫することがほとんどない、マンネリズム化した指導の傾向があるということである。現在でもまだ完成形模倣型の指導方法で学習者の主観を無視した指導が主流となっているようである。このような指導の方法を、小論では「客観的指導方法」(つまり、完成形の抽象モデルを与えること)と呼ぶことにする。充分のレディネスをもっている者は「客観的指導方法」でも何とかついていけるだろう。

しかし、彼ら(出来る者)でももっとうまくなるためには、教師と学習者との主観(考え方や感じ方)の「やりとり」が必要である。レディネス不足の者に「客観的指導方法」が採られていた傾向があったから、不得意者がうまれたのである。彼らへの指導が不適切であったと思われるのである。実際の指導場面では、こんなにはっきりとパターン化はできないだろうが、次に考察する、「授業のあり方を規定する要因」を見るとレディネス不足の者(不得意者)に対しては、このパターン化とも言えると考ええる。

## 2. 授業のあり方を規定する要因

### (1) 制度と慣習による先入観

スポーツを手段(主に身体のために)として扱ってきた時代と、スポーツを目的として教えている現在と、ほとんどその制度は変わっていない。それは先に考察したように教員養成課程において指導方法を、将来、教師になる学習者に教える時の考え方にあまり変化がないのと同じ意味合いがあるように考えられる。いままでの授業のあり方の、大きな特徴として、小学校から高等学校までのどの段階でも、(a)1クラスの学習者の人数が多いこと。(b)どの学習者にも同じ時間数をかけていること。(c)誰に対しても同じような指導方法(「客観的指導方法」)を採っていること、(d)そのスポーツの基礎的なことを少し教えると後はゲームばかりをする傾向があることなどである。10数年間にわたる長いスポーツ教育でも、これでは、不得意者は教えて貰ったことにならないのではないかと考える。必修の制度はやっと変わりつつあるが、1クラスの学習者の人数、一種目にかける時間数等はまだまだあまり変化の兆しもないようである。不得意者がいるのは事実であり、指導方法や制度などにおける問題は今後吹き出してくるよう思う。しかし現在、あまり問題が表面化してこないのは、慣習として長くやってきたことを人間はなかなか振り返らないし、いろいろなことが絡み合っている慣習は急に変えられるものではないからである。また、長年慣習としてやられてきた



ことがいろいろな「先入観」をつくり、反省させないように影響しているからとも考えられる。つまり、慣習としてやられてきたことが、「先入観」となり、それが指導を不適切にしたり、スポーツ教育の目標を不確定にし、制度までも疑問視しないように作用しているようである。特に「先入観」には、スポーツ教育本来の目標が達成されなくても、教師も学習者も逃げ込める隠れ蓑になっているようなものもあるのではないだろうか。

## (2) 身体のためにという「先入観」

学校体育の目標には、慣習として昔から身体目標（体力向上、健康維持など）があげられている。このため学校体育には、身体のためにという「先入観」があり、極端な言い方をすればスポーツが出来るようにならなくても、身体のためにになっているから良しとする考え方になりがちである。具体的には、スポーツ教育は受験教育からの息抜きの意味があるとさえ言われていることである。そこには、スポーツの本質、性質である勝ち負けを競うこと（ほとんどのスポーツがゲームの形式がとれることも絡んでいて）の面白さに授業をまかせ、ゲームばかりをする傾向がある。学習者もそれを望む傾向がある。すると、不得意者は、うまくなくても運動不足解消、ストレス解消になれば、また、他教科にない汗を流す快感があるから良いという感じの授業になり易い。また、体力が基礎という先入観は、要素的体力をつければ、誰でもスポーツがうまく出来るようになるという考え方（「体操」）で、それは、1クラスの学習者が多くても良いという制度を認めることにも繋がってくる。この先入観が、強いために「運動の一般的習得過程」を理解している教師は非常に少ないと言ってよい。さらに、体力が基礎という先入観は、うまく指導出来ない教師の不得意者に対しての言い訳になっている。（「あなたは、体力不足だから出来ないのですよ」と）。学習者の中にも、出来ないのは、体力がないからだ、と自分を納得させている者もいる。体力がないから出来ないと考えることは、やり方の幅を狭くしてスポーツ観を一つにしていることにも関連するのである。

## (3) 自然科学的な考え方の重視と臨床の知軽視の「先入観」

現状のスポーツ教育では、自然科学的な考え方が絶対で、臨床の知軽視の「先入観」（臨床の知的思考方法があることもあまり意識されていない）の影響を受けての指導方法、制度のあり方の傾向が強いように思われる。つまり、現状の指導方法や制度は「ついていかれる者」だけへのもので、極論すれば、教えてあげなければならない者に対してほとんど教えたことにならない指導方法、教師が教えてあげたくてもなかなか教えてあげにくい制度であったということである。この「先入観」は、スポーツを教える者（教師）と学ぶ者（学習者）との間の主観的（認識）なことの「やりとり」が必要であることをも捨ててしまったと言えるだろう。現状では、教え一学ぶ過程で教師も学習者（特に不得意者）も、自分の主観を出さない傾向があるように思える。教師は、そうするように教員養成時に教えられた傾向があるし、指導の実際場面でもそのほうが「楽」であるから。ま

た、制度などによる授業のあり方からそうならざるを得ないことにも起因している。不得意者も指導傾向から、自分の主観（意志）を押し殺すしかないようである。そこには、後で考察するが、また別の「先入観」が生まれてくる。スポーツ教育における教師の仕事には、多少なりとも職人的な面が必要であるのに、多くの教師が学習者を物として扱っている大量生産的な（機械的な）指導をしていた傾向があると言えるのではないだろうか。

### 3. 現状のスポーツ教育の中で不得意者はどうなるか

小学校入学時にレディネス不足だった者が、現状のスポーツ教育の中で、学年が進むにつれてどうなっていくのを考えてみたい。彼らはレディネス不足の状態である。そのため次のような配慮が大切である。(a)彼らの能力状態にあわせて指導すること、(b)習得に時間をかけること、(c)教師と学習者との主観の「やりとり」を頻繁にすること、(d)どちらかと言えば量より質を先に身につけさせること、(e)やる気を起こさせることなどが必要である。しかし、今まで述べてきたように全部がどの学校段階でもやられていない状況にある。したがって、個々の一連の動き（運動）のうまさも身につけていないことが多い。一連の動き（運動）のうまさがないためにゲームの動きのうまさも身につかない。それでいてゲームばかりをする傾向がある。一連の動き（運動）のうまさがないまま、勝ち負けを競うことばかりをするのだから、力をいっぱい使って、量ばかりを求める傾向になるのである。このようなことが小学校時から繰り返され、そこに体力が基礎という先入観もあれば、スポーツには力があるというイメージを抱き、ステレオタイプ化した、力まかせの動きができあがるだろう。力をうまく使った方が気持ちよいはずなのに、力を沢山使って満足感を得ているようである。「流れ（リズム）のよさを力というイメージで捉える」ことができないのではないと思う。卓球などで、インパクトの時に、一気に力を入れてラケット面の向きを急に変えて打つ者は以外と多い。これでは、力をいっぱい使うのだが、せっかくの当てるまでにつくられた運動エネルギーをボールに伝えられないことになる。また、レディネス不足の状態に完成形の抽象モデルを与えられることが繰り返されるのだから、早く完成形の抽象モデルに追いつかなければならないと思い精神主義（無理に頑張り通す）が働くように思われる。これでは、自分がどう動いているかを自己評価出来ないし、一連の動き（運動）のうまさも身につかないだろう。さらに、自分の能力状態<sup>⑨</sup>にあったやり方で、段々とうまくなっていく方法があることも、自分の能力にあったスポーツのやり方があることも分からないまま学校体育を終わる者がいることに繋がるのではないか。つまり、「やれば出来るようになる」ことがわからないまま、学校体育を終わるということになるのである。また、時間割の枠内でうまく出来るようにならないと「私は運動神経が鈍い」と思い込むようになる。このような授業では、学習者が自分で自分の能力状態が分からなくなるだけでなく、自分の主観を自分で大切にできなくなる

ように教育しているのだと言ってもよいだろう。(たとえ教師から出された課題とはいえ、自分のレディネス以上のことを何の疑問もなくやろうとすることである。言い換えれば、完成形の抽象モデルに従うばかりの傾向でそれでは自分は出来ないんだと、無理をしているんだと感じられなくしてしまっているようなことである。)

現状では高学年になるほど、レディネス不足の者(不得意者)には一連の動き(運動)のうまさを身につけるにはマイナス条件が累積されていくようである(スポーツには力が要するというイメージを抱くなど)。スポーツ教育の現状では、レディネス不足の者にとって、スポーツ観が一つ(勝つことばかりに向かう傾向と、うまくなっていく方法が一つしかない傾向)の感じであり、彼らは自分の能力を見極められないで無理をするようになるか、自分には出来るわけがないと諦めるようになるかという結果に繋がることしかない。

### Ⅲ 「スポーツ教育の一貫性」

#### 1. 「スポーツ教育の一貫性」とは

スポーツ教育の目標は、できるだけ多くの学習者がスポーツが出来るように、さらには、もっとうまく出来るようにと教師が支援することであると考え。それも含めて「スポーツ教育の一貫性」とは、小学校、中学校、高等学校の教師が「一連の動き(運動)のうまさを身につけさせること」に「関連」をもって指導して、なるべく出来ない者を少なくするようにすることであると考え。

具体的には、どの段階の教師も、その授業での、その一連の動き(運動)に対する「その学習者個々の状態(精神的、運動能力的)にあわせた指導」をすることである。そのことによって、「関連」も「共存」も出来る可能性が増えることになる考える。

「関連」とは、ある一連の動き(運動)のうまさを身につけると、それが、次の一連の動き(運動)のレディネスになるということである。系統性の似ている運動の、例えば、力の入れ方(リズム)などが出来やすくなるということなどもこのことである。

「共存」とは、どの学校段階でもその学習者の能力状態にあった指導をしているから、自分の能力にあったやり方で、段々うまくなれることがわかり、学習者同志である程度教えあえるようになれること、また、それなりのうまさもあるから、一  
二  
八対人とする運動の場合、相手にとって容易なことをしてあげられることをいう。

スポーツ教育において、教師は意識的に「共存」させる指導の仕方をする必要があると考える。学習者が高学年になるほど一連の動き(運動)=(スポーツ)が出来ない者を少なくしていく努力を教師がするべきであるが、反面、学習者が大きくなればスポーツ種目選択への主体性を認める制度を考慮しなければならない。これは、制度の問題であるが、「スポーツ教育の一貫性」を実践するには必要なことと考える。

「スポーツ教育の一貫性」で最も重要なところは学習者の主観と主体性を学校体育を通して大切にすることだと考える。スポーツをするには学習者の主体性、つまり、やる気や種目選択の自由を大切にすることが必要である。小学校低学年時は将来の可能性を保証するために、いろいろな一連の動き（運動）＝（スポーツ種目）を行わせた方がよい。ただし、そこでやる気を起こさせるためにも、いろいろな能力の学習者がいることから、さらには多少やらせているという意味があることから学習者の主観（授業ではうまさを求めている考え方）を、大切にしてあげなければならないと考える。つまり、その学習者の能力状態にあわせて指導するということである。

教師が不得意者の主観（感情）を大切にすることは、教師が自分の主観（考え方）を大切にすることでもある。教師は自己のもっている運動知識、運動経験、指導経験などをもとに、その学習者の運動経過を細かに観察したり、運動共感したりして、その動きがその学習者にとっては是なのか非なのかを判断したり、また、その実施結果が学習者の相手にとって善なのか悪なのかを判断して、課題を変更したり、助言したりする。教師のこれらの行為は主観的にやっているものとする（この辺りが教師の職人的な仕事の面）。教師の主観が大切なのだが、いつまでやってもその学習者の運動経過、実施結果がよくなる場合には、与えた課題、助言などを考え直してみる必要がある。つまり、出来たかどうかを最も大切にしなければならないのは当然のことである。

教師が不得意者の主観（考え方・感情）を大切にすることは、彼らが自分の主観（考え）を大切にすることにも繋がると考える。「スポーツ教育の一貫性」をもって長年指導されると、自分の能力にあったやり方で段々うまくなれることが分かってくるだろう。自分の能力にあった課題だから運動能力的にも、精神的にも余裕ができて、自分がどう動いているかを自己評価できるようになるだろう（自己評価出来ないのでは教師との主観の「やりとり」も効果がないことになる）。すると、ステレオタイプ化した力まかせの動きや、スポーツには力がいるというイメージは、現状よりは少なくなるのではないだろうか。また、いろいろな運動のうまさをも身につけ、レディネスの積み重ねもでき、自己評価も出来るならば、学習者（不得意者）は、自分の身体に対する主観を取り戻すこと（自分の能力を知り、このやり方では自分は出来ないんだ、これでは相手に迷惑だと分かることなど）になると考える。不得意者の主観を取り戻すためにも「スポーツ教育の一貫性」が必要と考える。

## 2. 「スポーツ教育の一貫性」の実践

### (1) 「先入観」を破る教師であること

現状では、不得意者は努力不足、体力不足などから「出来なくてもしかたがない」という先入観がある。また、身体のために運動するなどの他の目的もあり、「うまくならなくてもよい」という先入観が教師にも、学習者にもあるように思

える。先ず、こうした先入観をなくす必要があろう。それには、教師自身が不得意者に対する指導方法を改めることである。その上でその実践を長年続けることである。それによってやっと学習者の先入観も薄れてくると考える。

学校体育のスポーツ教育で、不得意者も教えてもらえるのだと、彼らが思えるようになるくらいに、小学校、中学校、高等学校の教師は、一貫性をもって指導を実践していく必要がある。そのためには、学校体育全体（小学校から高等学校までの指導方法、制度、歴史的習慣からの先入観など）を変えなければならないだろう。

このことを改めるには相当の長い年月がかかるだろう。先入観には、人間の心に関わるからそんなに簡単には変えられないだろう。しかし、これは心の問題（考え方、感じ方の問題）であるから、かえって個人が納得できれば、すぐにも変えることは可能である。例えば、教え一学ぶ場で「客観的指導方法」に染まってしまう不得意者が、その教師の主観（自分はこうだと考えていることがら）を生かした指導方法が、自分にあっていると感じ取れるなら（その不得意者の主観によって）、その場を今までとは違ったものに変えられるのである。ところが考察したように、教師も学習者も自分の主観を出さない、出せないような現況である。したがって、クラス全体での教え一学ぶ場は、なかなか変わってはいかないものとする。このことは一般的によく問題にされることの、全体と個の問題であり、全体を変える（全体が変わる）には時間がかかるだろうが、個は納得できれば現状の全体の枠の中でもすぐ変えられるということである。

全体と個の問題を出したが、今までの学校体育は、全体によって個（教師も学習者も）が支配されすぎていた感じが強いように思われてならない。例えば、抽象モデル（全体）に不得意者（個）を合わせて（合わさなければとして）いたように。

最近、個（主に学習者）を大切にすることが言われているが、今までの全体が強すぎて個を大切にす中味がまだはっきりされていない状態が「現状」であると言ってよい。教師が、個である不得意者を大切にするにはどうするかが分かっていなかったように。

全体から個が変わること、個から全体が変わること、どちらも大切であるが、ここでは個から全体が変わることに主眼をおいて「スポーツ教育の一貫性」を述べたいのである。つまり、「主観的な指導は駄目で客観的でなければ」という先入観を破り、「教師自身の主観（考え方）を大切に不得意者の主観（感情・感覚）を取り戻そう」とする教師が増えることから、「スポーツ教育の一貫性」が始まると考える。

## (2) スポーツ教育における教師の仕事

現行の学習指導要領には、「スポーツ教育を生涯スポーツに繋ぐ」とか、「運動を楽しく出来る能力や態度を養う」などとうたわれている。しかし、スポーツ教育において不得意者がいることは事実である。そのことの、多くの責任は教師にある事を、多くの教師は考えていないようである。それは、スポーツ教育におけ

る不得意者に対しての教師の仕事がはっきりしていなかった（文章上ははっきりしているが、考察してきたように具体的にはっきりしていなかったところがある）からだと考える。また、学校体育の歴史的慣習（制度も含む）からの先入観などによる、スポーツ教育の目標が不確定になっていることも影響しているものと思われる。

しかし、主な理由は、人間が生きるということにとってのスポーツ本来の意味を、また、人間が一連の動き（運動）を習得していく過程を教師がしっかり理解していないことにあると考える。

前者に関しては「やらなくてもよい自由がある」こと。やるとしたら、レベルはいろいろあるが、いずれの場合も「偶然でなく出来る」必要があることなどが挙げられる。しかし、現状ではスポーツを、「みんながやらなければならない」として、無理にやらなくてもいいスポーツを「やらせている」ことに、教師が意識を向けていないからだと考える。

後者に関しては、スポーツに対してもっているレディネスやイメージなどが一人ひとり違うこと、スポーツは「暗黙知」であること、運動の習得には「運動の一般的習得過程」（レディネスを積み重ねていく）があること、一つの一連の動き（運動）の習得にゆっくり時間をかけていく過程等があるのに、考察してきたように、自然科学的な考え方が絶対で、臨床の知を軽視する歴史的な影響もあって、みんなに同じ指導方法（「客観的指導方法」）で教えられる。「体力をつければ」できるようになると多くの教師が考えていた傾向があるからだと考える。それは、スポーツと人間の関わりを、臨床の現場から問う教師が少なかったということでもある。

今まで教師の責任ばかりを考えてきたが、結局、スポーツ（一連の動き（運動））をする、スポーツを教える、スポーツを学ぶことだけに限ってみても、「人間とは」、あるいは「自分とは」への問いかけを教師一人ひとりが、学習者一人ひとりがしてこなかった（先のスポーツを「みんながやらなければならない」としてしていることも影響している）ことに、教師の仕事が何かをはっきりさせなかった理由があるように思える。教師の仕事がはっきりしないことは、指導方法、制度における問題があまり表面化しないことに、また、「スポーツ教育の一貫性」をも問題にしなくなることに関連していると考ええる。

## まとめ

学校体育でのスポーツ教育の現状（指導方法（完成形の抽象モデルがみんなに与えられる傾向）や制度（1クラスの学習者数が多く、みんなに同じ時間数があてられる）など）にあっては、小学校入学時にスポーツ運動に対してレディネス不足の者は、抽象モデルに従おうと無理して努力を続けるか、自分は「運動神経が鈍いから」・「体力がないから」もう出来ないと諦めてしまうようである。その結果として不得意者となるようである。しかも、そこには、一つのスポーツ観（勝つことばかり向かう傾向と、うまくなっていく方法が一つしかない傾向）に

彼らの主観（目的）が奪われているように思われる。

この不得意者を少なくするように、小学校、中学校、高等学校の教師が積極的に小学校から高等学校までの「関連」をもって指導する「スポーツ教育の一貫性」が、現状においてはほとんどなかったように思われる。

「スポーツ教育の一貫性」とは、教師が、その授業でその「一連の動き（運動）」に対しての不得意者（レディネス不足者）の能力状態にあわせた指導をすることである。教師がこれについて努力をすると、彼らに一連の動き（運動）のうまさ が身につっていくとともに、それがまた「レディネスの積み重ね」ともなる。このような課程を経て積極的な「関連」をもった指導となると考える。

またその時、教師はもっている運動知識、運動経験、指導経験などをもとに不得意者の運動経験を観察しながら、自己の主観（教師の主体的な創意と工夫）をいかして運動共感し、助言したり課題を与えることが大切と考える。この教師の主観をいかすことが、スポーツ教育における教師の大切な仕事であるのに、現状では、教師の主観をいかした指導があまりなされていないと考える。そこには、自然科学的な考え方が絶対で、臨床の知軽視という「先入観」から、一連の動き（運動）を自然科学的に研究することがあっても、それを「教えるとはどういうことか」、「学ぶとはどういうことか」が臨床の現場から問われることが少なかったためではないかと考える。

「スポーツ教育の一貫性」が長年にわたり実施されると、いつも彼らの能力状態にあわせた指導がなされるようになる。その結果、運動能力的にも、精神的にも余裕が生まれるから自己評価もできるようになる。彼らは自分の能力状態を知ることができ、このやり方では自分は出来ないこと、こうしたやり方では相手が困ることなども分かるようになる。終極的には、彼らが自分の主観（感覚、考え）を取り戻すことができるとともに、他との「共存」もできると考える。

#### 引用文献

- ①岸野 雄三（著）  
「現代スポーツ百科事典」（大修館書店） P. 2～3
- 今村 嘉雄（代）  
「新修体育大辞典」（不昧堂出版） P. 764～765
- ②今村 嘉雄（代）  
「新修体育大辞典」（不昧堂出版） P. 37
- ③鵜川 是（著）  
「日本体育学会第41回大会号」（日本体育学会） P. 570
- ④クルト・マイネル（著） 金子 明友（訳）  
「スポーツ運動学」（大修館書店） P. 145～271
- ⑤鵜川 是（著）  
「体育科教育」（'86年2月号）（大修館書店） P. 77
- ⑥マイケル・ボラニー（著） 佐藤 敬三（訳）  
「暗黙知の次元」（紀伊国屋書店） P. 15
- ⑦中村 雄二郎（著）

- 「魔女ランダ考」 (岩波書店) P. 134
- ⑧中村 雄二郎 (著)  
「魔女ランダ考」 (岩波書店) P. 135
- ⑨マイケル・ボラニー (著) 佐藤 敬三 (訳)  
「暗黙知の次元」 (紀伊国屋書店) P. 38
- ⑩金子 明友 (著)  
「運動学講義」 (大修館書店) P. 4~5
- ⑪村上 陽一郎 (著)  
「新しい科学論」 (BLUEBACKS) P. 82~88
- ⑫村上 陽一郎 (著)  
「新しい科学論」 (BLUEBACKS) P. 152~153
- ⑬野口 三千三  
「野口体操」 (サンケイ新聞社) 1992年12月27日
- ⑭クルト・マイネル (著) 金子 明友 (訳)  
「スポーツ運動学」 (大修館書店) P. 26

#### 参考文献

- (1) 文部省教務関係研究会 (編)  
「教務関係執務ハンドブック」 (第一法規出版)
  - (2) 日本体育協会監修  
「現代スポーツ百科事典」 (大修館書店)
  - (3) 稲村・今井・他 (編)  
「登校拒否のすべて」 (第一法規出版)
  - (4) 高田 典衛 (著)  
「体育嫌いをつくらない体育授業」 (第一法規出版)
  - (5) 重松鷹泰・岸 俊彦 (著)  
「わかる授業のすすめ方」 (第一法規出版)
  - (6) 神保 信一 (著)  
「学業についていけない子の指導法」 (第一法規出版)
  - (7) 遠藤 五郎 (著)  
「教師の研修ノート」 (第一法規出版)
  - (8) 学校改善研究会 (編)  
「学校改善アイデア実践事例集」 (第一法規出版)
  - (9) 宇土 正彦 (著)  
「新しい体育の考え方・進め方」 (大修館書店)
  - (10) 高田 典衛 (著)  
「よい体育授業の探求」 (大修館書店)
  - (11) 高田 典衛 (著)  
「よい体育授業の構図」 (大修館書店)
  - (12) 四宮 馨 (著)  
「体育学習指導の理論と実際」 (ベースボール・マガジン社)
  - (13) 岸 俊彦 (著)  
「教授学習過程の研究」 (明星大学出版部)
  - (14) 井上 一男 (著)  
「体育教育概論」 (杏林書院)
- (本学助教授・初等教育)